

咲村 観

住友の元勳



友の元勲

觀



講談社

住友の元勲

昭和五十九年十二月十日 第一刷発行

定価 一〇〇〇円

著者 咲村 観

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一三二

電話・東京（〇三）九四五―二二二（大代表）

振替・東京 八一三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

©咲村 観 一九八四年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

ISBN4-06-201384-3 (0)

(文2)

目次

第一章	第二章	第三章	第四章	第五章	第六章	第七章	第八章	第九章	第十章
行	波	混	流	春	登	冬	夕	波	過
の									
雲	浪	濁	水	雪	龍	虹	陽	濤	雁

装帧
熊谷博人

住友の元勳

第一章 行 雲

別子^{べっし}の山並みが、夕陽に映えている。

駒之介は、舳先^{はなはしら}に突っ立って、その眺めに見とれてゐた。

三千尺を超える山容は、故郷^{こきやう}の比良山を彷彿させる。

九歳の駒之介が、近江国野洲郡八夫村（滋賀県野洲郡中主町）の生家を発ち、叔父北脇治右衛門百禄に伴われて大阪へ出、鰻谷^{うなぎだに}の泉屋（住友の屋号）を訪れて当主友聞^{ともきこ}にお目通りののち、帆船に乗って安治川を下ったのは、三日前のことであつた。

堤には菜の花が咲き誇り、彼方には大阪城の天主閣が聳^{そび}え立っていた。

故郷^{こきやう}を発つて以来の一ヵ月間が、いまは夢のように思われる。

「あれが、行先の別子山だ。銅山の仕事には、苦勞が多

い。若年のそなたゆえ、或いは里心^{さとこころ}を起こすのではと心配でならぬが」

治右衛門が傍らから、言葉をかけてくる。

別子銅山の枢要な地位にある治右衛門には、将来の榮達^{えいだつ}にける夢がある。

「わたくしは、決心をして国を出たもの、おめおめ近江には帰れませぬ。それにわたくしは、銅山で働くことに、生き甲斐を感じております」

駒之介は、別子銅山の風景に眼をやりながら答えた。かすりの着物が夕陽に映え、あざやかな藍色を浮き彫りにする。

医師を家業とする北脇理三郎景瑞の次男として、駒之介が生を受けたのは、文政十一年（一八二八）のことであつた。

幼少の頃は、なに不自由なく過した。だが、物心つくにつれて、他国を旅してみたい氣持が、ぼつ然と芽生えてきた。

帰郷した叔父から、大阪の街や別子銅山の状況を聞くにつけ、その思いは募^もっていった。

「家業の医師は兄が継ぐ。俺は次男ゆえ、いずれ家を出なければならぬ……」この判断も加わり、父母を説得しての別子行きとなつた。

近頃では、四書も素読でき、そろばんにも通じている。あと一、二年の修業をつめば、銅山の勘定方を務めることが可能であった。

加えて、数千人の稼人を抱える豪商、泉屋が、駒之介は好きであった。一介の商人^{あきんど}ではなく、幕府の御用銅を承わる政商であることが、心をひくのである。

「その覚悟があれば、云うことはない。泉屋での奉公が、そなたの運命を開くもとになればよいが……」

治右衛門はつぶやいて、海の彼方に視線を移した。

落陽が、海面を金色に染める。

さざ波の立つ風景を眺めながら駒之介は、思いを家郷の近江の国に馳せていた。

翌天保八年（一八三七）二月、大塩平八郎の乱が起った。

噂は大阪の泉屋本店から、別子へ伝わり、鉱山の仕事に従事する山民の耳目をそばたせた。

駒之介が五歳であった天保三年（一八三二）から、諸国に飢饉が相次ぎ、それは現在も続いている。米価は騰貴し、大阪市内では、困窮者救済のための施米が、天保四年に実施されたが、それで事態は治らず、飢饉深刻化の気配に、国内の各地で「打毀し」が続出し、世相は混

沌とした状況を呈した。

翌天保五年には、水野忠邦が老中になり、將軍家慶の命を受けて、「天保の改革」に着手し、儉約、文武の奨励、奢侈淫逸^{しやういんいつ}の矯正につとめたが、厳格に過ぎたため、世情の不安と相俟って、人望をつなぐことができなかった。

そのようななかで、大阪町奉行所の与力、大塩平八郎は窮民の救済のため、非常米の施行を奉行所に建言したが入れられず、自らの蔵書売って、彼等を救った。だが、この行為は、奉行所の容れるところとならず、譴責を受けた大塩は、農民を糾合して乱をおこし、自殺した。

「大へんなことになったものだ。この状況だと、余波は四国にまでおよぶかも知れぬ」

「左様でございますな。昨年一月には、別子銅山の改革について、達しがあり、産銅量の増加は勿論、元禄十五年（一七〇二）以来認可されている安値買請米、八千三百石についても、節約のおふれが出され、山民も動搖の気配を見せておりますゆえ」

叔父治右衛門と言葉を交す手代の声が、聞こえてくる。

駒之介は、文机から身を起こした。

近頃は、四書の独修に使用される經典余師けいてんよしに読み耽かつてゐる。ぼう大な量のそれを読みこなすことは、容易ではない。

しかし、来年一月からの銅山勘場への出仕を控えて、学問だけはおろそかにできなかった。そのため、叔父一家の書生を務める傍ら、儒学の修得に励んでいる。

折りにふれて、いま一人の叔父で洛北らくほくの曼殊院まんじゅいんや近衛家で、学を講じている淡水にも書を寄せて、教えを乞うている。

別子にきて以来約十ヵ月、駒之介は、銅山の業務の把握と、学問を身につけることで、必死であった。

燈明の明かりが、室内を薄暗く照らしている。夕餉ゆうぐを終えたあとの銅山の居宅は、静まりかえっていた。

泉屋には、「手代共は役用が済んで寄り合うような場合は、学問を心掛け、家職の益費を論ぜよ」という掟書がある。それを鉱山の従業員達は守って、夜ともなれば共同宿泊所で、勉学に励んでいる。

家祖、住友政友が残した遺訓は、元禄三年（一六九〇）の銅山発見以前から、めんめんと受け継がれているのである。

「静かだな。皆、書物に読み耽かっているのであろうか」

木枯らしの音が、耳底をよぎるのを覚えながら、駒之介はつぶやいた。

明かり障子を開けると、縁側へ出て空に浮かぶ月を眺めた。居宅の並びが、その明かりのなかに、黒い影を浮き出している。

別子銅山には、五千人の従業員がいる。大多数が山元その他からの採用者であるが、要職の地位にある者は、皆、大阪の本店から派遣されている。なかには、諸国からやってきた就業者もいる。彼等のための巨大な宿泊所も、坑道近くには、設けられている。

山上の街、これが別子銅山を取り巻く環境であった。庭を隔てた居宅には、幕吏の大村が家族や使用人と住まっている。

障子に映る灯を、駒之介はぼんやり眺めた。頭のなかには、半刻前から読んでいた經典余師のことで、一ぱいであつた。

「そうだ。大村さんにわからぬ点を聞いてみよう」ふとひらめきが走った。

決心すると行動が速いのが、駒之介の特長である。書物の一部を抱えるように持つと、雪駄をはいて庭へ降り、そのまま生垣を越えた。

大村は、儒学だけでなく、唐詩にもくわしい。漢詩に

興味を覚えはじめた駒之介にとって、それは「渡りに舟」の思いにも等しかった。

「四書以外に、唐詩にもこれからは研讀を深めよう」そう心に決めて、玄関へ廻り、案内を乞うた。

「駒之介か。相変らず学問に眼がないそうだが、その様は……」

書物を抱えてやってきた駒之介の心中を、大村は見抜いていた。

二人は書齋に入り、茶を飲みながら、儒学や漢詩について語り合った。

大村は江戸育ちのせい、諸国の状況にくわしい。

「このまま打毀しや一揆が続発すれば、水野様の為政も、効果があがるまい。陽明学者の大塩様の義挙に共感を覚える者は、諸国に万という。いやはや大へんな世とはなったものじゃ。別子銅山も元禄時代以降は、疲弊の一途をたどっている。遠町深鋪（燃料の薪炭を採る山が遠くなり、坑道が深くなること）のせいだが、年間六、七十万斤の産銅高では、五千人の山民を養うことも苦しかろう。ともあれ、長崎御用銅をあずかるおかげで、安値買請米が差し止められず、稼業が安泰であることは幸せなことだ。しかし、給米が滞る事態が発生すれば、たちどころに行き詰まる。そなたも泉屋の稼人として、よくそ

のことを心得て置くがよい」

四書の講釈が終ったあと、大村はそう語った。

駒之介はうなずいて、云われたことを、心にとめた。

「そなたは学問のみならず、詩歌にも素養がある。今後は、つくった漢詩をもってまいれ。句説を教えて進ぜようから」

「有難き幸せ。是非お願い申し上げます」

駒之介は、笑みを浮かべて、言葉を返した。

漢詩には心を和ませ、気宇を壮大にするなにかがある。それを駒之介は、ここ半年間の作詩のなかで、知っていた。

季節は夏を迎えた。

吹所の煙が、風にたゆたって、東へ流れてゆく。

駒之介は廊下に佇んで、その眺めに見とれていた。

近江の国を発って以来、はや一年四ヶ月が経っている。

銅山の仕事は、折りにふれて山道をのぼり、各所の坑道を見分して、凡そ、察しがついている。焼吹き（やきぶき）の状況や燃料伐採作業も、現場を見て知っている。

あとは来年の勘場勤務を待つだけなのだ。

苦しい事業経営にかかわらず、駒之介は、泉屋の発展を信じて疑わなかった。

現在は銅山業以外に、諸藩の蔵元、掛屋、札差を営み、三代目の吉左衛門友信の時代（貞享二年——一六八五）以来中断していた両替業にも手を染めている。

だが、駒之介が別子へやってきた背景には、無限の宝を秘めた銅山に対するあこがれのような気持があった。別子銅山がある限り、泉屋は滅びない。そう考えたのである。

大阪は天下の台所にふさわしく、江戸初期から、町人階級が幅をきかせている。その実力は諸大名を凌ぎ、越後屋呉服店の三井や、両替業を本業とする鴻池は、現在も隆々と栄えている。

元禄時代に「大阪に比ぶものなし」と云われた泉屋は、鉱山の遠町深鋪が災いして、いまは苦しい商いを強いられている。しかし、いつかは陽の目を見る、子供心に駒之介はそう信じていた。

襖があいて、治右衛門が姿を見せる。

「来年の仕事始めの日から、勘場への出仕が決った。これで兄も安堵することであろう」

そう語って、治右衛門は南に聳える銅山に、視線を移した。

「お蔭様でわたくしも、一人前の商人になることができます。御配慮に対し、厚く御礼申し上げます」

駒之介は答えて、晴れやかな表情を見せた。

学問に明け暮れているうちに、秋が過ぎ、冬を迎えた。別子山は、くすんだ緑色に変色し、毎日のように強い西風が吹き荒れた。

「いよいよ泉屋の奉公人になるのか」

荒涼たるあたりの佇いを眺めながら、胸のうちでつぶやいた。

味噌の仕込み作業や餅つきも終り、あとは正月を待つばかりになっている。

郷愁の思いは、さらさない。

空に舞う鳶の姿を駒之介は、無心の気持で眺めている。

翌天保九年（一八三八）一月から、駒之介は泉屋の従業員に名を連らねた。

十一歳であった。

のちに新右衛門と称し、二年後の天保十一年（一八四〇）二月には、半元服の儀式を執り行った。

それ以降、新右衛門には、平穏な日々が続いた。日中は勘場に勤め、夜は書物に読み耽る日課に明け暮れたのである。

折りしも、その年の五月、大阪本店と別子銅山において、別子開坑百五十年祭が盛大に行われ、泉屋の歴史と

伝統に、新右衛門は思いを新たにした。

「元禄四年の採掘開始以来、百五十年の歳月が経ったのか。遠町深鋪が度を増す筈だ。この分だと、あと三十年も掘れば、別子銅山は疲弊状態に陥るかも知れぬ」

祝典の式場で、酒を口にしながら、ふと思った。

翌天保十二年（一八四一）五月から「天保の改革」が本格化した。老中水野忠邦に対する評判は悪化した。令の内容が、厳し過ぎたためである。

混沌とした世相のなかで、天保十三年を迎え、十五歳になった新右衛門は、三月、元服の儀式を行った。そして七月には、別子銅山鋪方帳場に、九月には、弟地帳場に勤務がかわった。

天保十四年を迎えると、改革に失敗した水野忠邦が罷免され、泉屋の商いも、当時出された「無利息年賦返済令」によって、江戸浅草店（札差業）の経営が悪化した。

新右衛門が十八歳を迎えた弘化二年（一八四五）には、九代目当主友聞が隠退し、友視が十代当主の地位に就き、新右衛門自身もこの年の一月、下山して新居浜荷方帳場へ勤務が変更になった。翌弘化三年には、再び勘場へ帰り、小弘方手伝いを命ぜられた。

銅山の実務に習熟するための仕事の変更は、その後も

行われたが、二十一歳を迎えた嘉永元年一月には、十二年振りに大阪本店へ出頭して主人友視に目通りし、その際、別子銅山での勤務を賞でられて、京縞反物料と住吉芝居料を支給された。そして、約四ヵ月大阪での生活を楽しんだのち、五月二十日に帰山した。翌嘉永二年六月には、勘場大弘方本役を命ぜられた。

だが、この頃から泉屋は、営業の一部を縮小せざるを得ない破目に追い込まれ、家政改革や江戸中橋両替店の閉鎖、その正木町への移転、それらに伴う江戸本両替仲間および一橋家掛屋辞退等の波乱が相次いだ。

二十四歳になった嘉永四年（一八五一）には、勘場大弘預りに登用され、その間に「百年の謀は徳を積むにあり、十年の謀は樹を植えるにあり」との先哲の教えに発心し、銅山永遠の発展と公共の利益のために、植林事業をはじめた。新右衛門が、別子銅山の改革に手を染めた最初の仕事であった。

一方、住友家内部においても、経営不振打開の方策が検討され、この年、新居浜で卯兵衛新田開発が実施された。

こうして、泉屋は、数千人の稼人を抱えながら、幕末の苦しい時期に差しかったが、長崎御用銅をあずかる豪商としての体面だけは、ともかく保つことができた。

しかし、新右衛門が二十六歳を迎えた嘉永六年（一八五三）、安泰の夢は破られた。同年六月三日の黒船（ペリー）来航による開国の要請が、その発端となった。

折りしも泉屋では、食糧の自給自足をめざして、惣開（新居浜）新田の開発中であつた。噂は燎原の火のように銅山に伝わり、鎖国令が解かれる気配に、幹部役職者は不安におののいた。

「この分では、南蛮吹の創始者蘇我理右衛門以来の外国への銅輸出に、異変が生ずるやも知れぬ」

「全くだ。そうなれば長崎での船積み業務にも、影響がでよう」

深刻な会話を交す、上役の声が聞こえてくる。

新右衛門は、視線をあげた。

文机のうえには、決裁を要する書類が、山積している。

「黒船の来航か。今後は、アメリカだけでなくロシアも、イギリスも、フランスもわが国に取引を要請してくるかも知れぬ。そうなれば、オランダ、清国との銅その他の商いは、変つてゆく」

緊迫した職場の空気を感じながら、新右衛門はつぶやいた。不安は覚えなかった。

諸外国との取引が可能になれば、銅貿易を主業務とす

る泉屋は、疲弊から脱することができる。そう判断していたからである。

加えてこの頃から役職の昇進と相俟って、未来にかけの夢が、新右衛門には、芽生えてきた。別子銅山の産銅量をあげ、三井、鴻池を凌ぐ豪商に泉屋をのしあげたいと考えるようになったのである。

やはり、商人になる以上、日本一をめざしたかった。

それほど、新右衛門の気宇は大きかった。

黒船の来航に国内が騒然とした気配におおわれ、開国の噂が乱れ飛ぶなかで、翌安政元年（一八五四）一月、新右衛門は、別子をあとにした。二十七歳の春を迎えて、縁談がもちあがつたからである。

泉屋の荷船に便乗して、大阪へ帰り着いたのは、二日後のことであつた。船着場の棧橋をあがると、鰻谷の泉屋本店をめざして歩いた。

心のなかには、見合いが予定されている今西徳右衛門の息女のこと、一杯であつた。

「二十三歳の女か、丈夫でつましやかであつてくれればよいが……」そう心で思った。

井ゲタを染め抜いた泉屋の暖簾が見えてくる。二階建

の並みはずれた建物であることもさることながら、蜿々
とめぐらされた土塀、広大な敷地、そのなかに設けられ
た巨大な吹所などが、新右衛門の眼を驚かせた。

泉屋は、元和九年（一六二三—大阪夏の陣の八年後）
頃から、大阪に居を構え、銅商い一筋に生きてきた豪商
である。

蘇我理右衛門が銅吹ききの技術を身につけて、京都の寺
町五条（現在の寺町松原下ル）に店を開いたのは、天正十
八年（一五九〇）のことであった。

十九歳の理右衛門は、出身地の泉州に因んで、それを
“泉屋”と称した。そして、粗銅のなかに含まれる銀を
分離する技法（南蛮吹き）を完成し、それによる挙収を
もとに、銅貿易と銅山経営に手を染めた。

天下が太平を取り戻した前記時期に、子息理兵衛友以
を大阪へ進出させ、それ以降、泉屋は栄えた。

理右衛門は、柴田勝家に仕えた越前丸岡城主、住友若
狭守政俊の子政行の二男で、仏門（涅槃宗）に帰依した
住友政友の姉を妻にめとり、のちに長男理兵衛友以を政
友の娘むこととして、住友家の分家を建てさせた。

政友は、涅槃宗開祖の空源の第一位の弟子にとりたて
られ、同宗の弘通に務めたが、幕府の宗教弾圧にあって
以降は、非僧非俗の立場から、商いはじめ、書籍出版

と薬種を扱う店、“富士屋”を興した。傍ら仏教史を究
め「法伝記」という著書にまとめたり、仏門に帰依する
者のために、多数の法話集を著した。

泉屋の発展にも意を用い、子孫のために、数々の遺訓
を残した。

その骨子は「世に処するには、正直、慈悲、清浄を本
とし、神仏を敬い、四恩と三宝の恩を重んじ、事に当っ
ては慎重、確実を旨として儉約を忘るな」ということに
あった。

賑わいを呈する本店の状況を眺めながら新右衛門は、
泉屋が二百数十年にわたって、豪商の地位を保ち得た根
源に、この政友の遺戒があることを知った。

暖簾をくぐると、板敷へあがり、執務に余念がない奉
公人達を眺めながら、座敷へ向って歩いた。

広大な庭園が、冬の陽ざしに映えている。築山の松や
手前の池、風雅な茶室、太鼓橋などが、視野をかすめて
ゆく。

当主友視にお目通りして、別子銅山の現況を報じ、併
せて、自らの婚姻のことを述べて、泉屋をあとにしたの
は、午すぎであった。

“明日は見合いか……”

近江の国からやってきている両親の顔を思い浮かべな

がら、胸のうちでつぶやいた。

婚姻は、その後滞りなく進み、三月はじめには、挙式の運びとなった。

それを終えて、別子へ発つ日、日米和親条約締結の報が、大阪の庶民の間に、噂となってひろまった。

「黒船（ペリー）が再びやってきて、神奈川で条約が結ばれたらしい。この様だと徳川幕府も、そう長い寿命ではあるまい」と新右衛門は思った。瓦版の号外に、道行く人々が歩みをとめる。

旅支度を整えた二人は、慌しい街の風景を眺めながら、安治川べりの船着場へ向って歩いていった。

新居浜での新婚生活は楽しかった。

銅山の居宅に住まい、勘場に勤める平穏な日々が続いたが、その年の暮れ幕府がロシアとの和親条約締結に踏み切った頃から、国内は不穏な空氣に包まれた。尊王攘夷論が台頭し、外国の要求に屈する幕府の姿勢を非難する声が、諸国の志士からあがりはじめたのである。

激動の時代が到来したことを、新右衛門は感じた。

幕府の事業を行う商いであるだけに、将来に対する不安は大きかった。

翌安政二年（一八五五）四月、新右衛門夫婦は、主人

友視の推挙により、元泉屋浅草出店支配人、広瀬義右衛門義泰（予州別家）の養子になることになった。将来の泉屋を背負って立つ人物と、当主から眼をつけられたのである。そして、その年の十一月には、別子銅山売場貸方大払兼務を命ぜられ、中堅幹部として、頭角をあらわしてきた。

だが、好事は長くは続かなかった。僻地での生活に慣れぬため、その年の暮れ妻相子が病いを得て、十二月二十日急死したのである。

予期せぬ事態に、新右衛門は悲嘆に暮れ、今後は妻はめとるまいと、葬儀の席で決意した。

それ以降はわびしい独身生活が続いた。その傷が癒えた安政四年（一八五七）三月五日、新右衛門は、義父の要請により、広瀬家の家督を相続し、二代目義右衛門を襲名した。妻をなくして一年三ヵ月目、三十歳のときであった。

同月には、別子銅山勘場大払方兼貸方役頭に進み、それを機に再婚の話がもちあがったが、義右衛門は承知しなかった。相子の冥福を祈るためにも、独り身を続けようと決心したのである。

二月には、江戸両替店を正木町から南横町西会所へ移転する措置がとられ、営業再開の運びとなったが、これ

で家政の改革が終ったわけではなく、別子銅山の運営自体についても、義右衛門には、為さねばならぬことが、数多く控えていた。

一方、日米関係はその後にも紛糾を続け、五月二十六日には、治外法権と長崎開港を認める下田条約が締結され、開国への気運が盛りあがってきた。

そのようななかで、六月三日、主人友視が病没し、十一月、吉次郎友訓が、十一代当主の地位に就いた。

若死はこの時代の慣らいとはいえ、あまりの転変に、義右衛門の心は滅入った。だが、緊迫した時代を迎えて、過去の思い出に浸ることは許されない。義右衛門は心を新たに、別子銅山の改革に打ち込んでいった。

翌安政五年（一八五八）六月、日米修好条約が結ばれ、続いて七月、英、蘭、露三国と、九月には仏国と同内容の条約が締結された。ここにきて、鎖国の夢は破れ、尊王攘夷論と開国論がうずまくなかで、世相は混沌とした状況を呈した。

いまは、心の傷は癒えている。

前年には、処女漢詩集「薄領余事」を刊行し、別子銅山での生活をうたって、独り住まいのわびしさをまぎらわした。

今後、この趣味は続けたい。

人生にはいかなる試練が待ち受けているや知れず、それを乗り切るには、心の平静を保つことが肝要であり、作詩は、その助けになる。

九歳で別子銅山に赴いて以来、義右衛門はそのことわりを把んでいた。

「日米修好条約により、神奈川、長崎、箱館、新潟、兵庫の五港が、自由交易港となった。アメリカ総領事ハリスが、安政元年の条約をたてに、取引の自由化を求めたためだが、大老井伊直弼殿も、思い切ったことをよくやるものだ。尊王攘夷論と開国論が渦巻くなかで、このような措置に踏み切れば、必ず志士達の怒りを買う。長州藩の吉田松陰殿は、アメリカ密航に失敗して以降、一時萩に謹慎中であつたが、二年前に私塾（松下村塾）を興し、尊王攘夷思想の鼓吹に務めている。門下生には、久坂玄瑞、高杉晋作、桂小五郎などの下級武士が、ひしめいている。嘉永五年（一八五二）『大日本史』を朝廷と幕府に献じた徳川慶篤や徳川斉昭侯、土佐の山内豊信殿も、同思想の信奉者だ。それに、梅田雲浜、橋本左内などの強硬派も、今回の条約調印に不満を鳴らしている。孝明天皇の勅許を得ず、老中堀田正睦殿が条約を議定し、これを井伊大老にゆだねた結果だが、この分では、やがて天下に波乱が起きよう。いやはや大へんな世